

トークセッション (1) ～高専教育のあり方～

2014/9/27@都立産業技術高専 荒川 C

パネリスト：

(株) 亀山電機 代表取締役社長 北口 功幸 (佐世保)

(株) 工学研究社 常務取締役 橋本 邦一

稲垣 悟 函館高専専攻科特専教授・マイスター (函館)

山西 敏博 小山高専准教授・英語

司会：畠中環境カウンセラー事務所代表 畠中 豊 (秋田 4 期)

短い時間ですが、高専教育に関してそれぞれの立場から話し合ってみました。

下記の様なトピックスを司会者から振り、各パネリストから発言して貰いました。

- 1) 現在のお立場から見て高専教育に関して日頃から感じていること。良い点、そうではない点。ご自身の関わりなど。
 - 外から見られる高専の印象：悪い印象は無いが、国立工業短大の様な・・・
 - 座学だけではない実習を重視した、工業大学より圧倒的に多い時間の専門教育
 - 理系⇒文系クロスオーバーの編入例は少ない。
 - 実際のプロジェクトを例題とした PBL (Project based learning) の重要性
 - エンジニア試験 (エンジニア度の評価) へのニーズが増加している

- 2) もう少し細かい点ですが、社会 (企業) ニーズと実際の教育のミスマッチについて感じていること、あるいは、ニーズそのものの時代変化に対する教育現場の対応のズレなど。
 - 中小企業といえども英文の文献を読みこなす能力や海外とのコミュニケーション力はこれからの時代必要
 - 日本語の論文 (やレポート) でも英文でアブストラクトを作る事はかなり役に立つ
 - 実戦で磨かれる (通ずる) ビジネス英語は、いわゆる教育英語とは異なる
 - 企業が求める人材の傾向：創造力、課題解決力、即戦力をますます重視
 - それに答える側の学校教育現場の限界がミスマッチを深める

- 3) では高専教育は今後どうあるべきかですが。知識かスキルかあるいは提案力かそれとも・・・。その中で企業や OB の関わり方や役割は? など。技術 (教育) とは、ある与えられた条件下での最適解を出すものとなりがちだが、ゼロから発想する能力 (提案・提案・発信力) などを含む教育の必要性は?
 - 工業専門学校とは呼ばれるが、一般科目が軽視されてはならない。
 - 技術教育と一般科目の教育はいわば両翼であり、片翼では飛べない。
 - 専門能力以外の三つの重要な能力：コミュニケーション力、プレゼン力、人間力
 - 問題解決力を磨く PBL をどの様に、どの程度カリキュラムに織り込むか。OB の活用：例えばマイスター制度など

- 地方の中小企業は新卒ではなく U ターン組を中途採用するケースも多い。それは、企業などでの社会経験を持った真の即戦力を得ると言う事も意味する。

4) 司会者が感じたまとめとしては、少し長くなりますが、

- 社会（企業など）においては、プロジェクト作業が圧倒的に多く、その中では専門性を生かしつつ、他のプロジェクトメンバーと良いコミュニケーションを保ちながら進める必要がある。
- その中で、自分の考えを他の人に示すプレゼン力、人間関係を上手く活用できる人間力は、専門スキルと同等以上に重要。
- 技術の伝承は必要。それをどの様にカリキュラムに織り込むか、高専 OB が技術者全体の 1%だから出来る事もある筈。高専教育・高専人というキーワードの中で。
- とは言いながら、年配 OB は自分の自慢話や成功体験を、若い世代に押し付けてはならず、むしろ失敗談や反省点をフィードバックすべき。今回の様な、ヤングセッションは、むしろ年配 OB にはかなりの刺激（逆フィードバック）になった筈で、ネットワークのつながりは必ず「双方向」でなければならないとも感じた。
- 結局、理想的な技術者とは、それなりの工学（理系）としっかりした人間学（文系）が合体した（両翼を具備した）存在なのかも知れない。学校教育の中でそれが何処まで可能かは問題だが、たとえ卒業時にはひ弱でも、この両翼さえあればどの様な状況でも「自分で」飛べるはず。
- この様なトークセッションを、老若の少ない人数で円卓を囲んで長時間話し合ってみたいとも感じた。

以上です。パネリストの方々には貴重なご発言感謝いたします。